

いのち、痛みに全力

FUKUOKA WAJIRO HOSPITAL



地域医療により大きく貢献!!

第11号

平成18年11月

病院機能評価認定 臨床研修病院

医療法人財団 池友会



福岡和白病院

〒811-0213
福岡市東区和白丘2丁目2-75
TEL.092-608-0001
E-mail:info@f-wajiro.biz
http://www.f-wajiro.biz

「健康教室」のご案内

福岡和白病院では、地域の皆様に病気についての理解を深めて頂く為に「健康教室」を開催しております。

当院の医師をはじめスタッフが、皆様の地域（公民館など）にお伺い致します。

どなたでも参加できます。

例えば少人数のグループでもお伺い致します。

あなたの地域でも、この健康教室はいかがでしょうか？

興味のある方は、是非ご連絡下さい。



11月の開催予定

- 11月 8日(水) 村田先生 消化器癌について(2講演)
- 11月11日(土) 村田先生 消化器癌について
- 11月14日(火) 富岡先生 救急の健康教室
- 11月16日(木) 村田先生 消化器癌について
- 11月18日(土) 稲原先生 目の健康教室
- 11月25日(土) 斉藤先生 心臓の健康教室
- 11月26日(日) 村田先生 消化器癌について

※開催場所は地域の公民館などになります

お問合せ先

福岡和白病院 地域医療室 (担当:竹元・松下)

☎092-608-0001

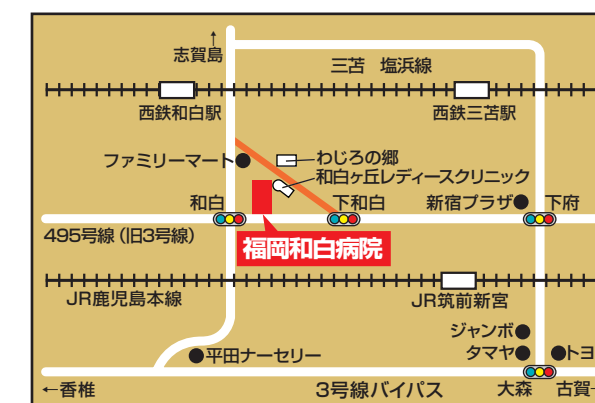
福岡和白病院の基本理念と基本方針

基本理念

手には**技術**、頭には**知識**、患者様には**愛**を

基本方針

1. 高度医療 学問的に、技術的に高い水準の医療を提供します。そのために必要な施設・設備の整備拡充に努めます。
2. 総合医療 患者様と医療情報を共有し、急性期治療から、早期リハビリ、在宅医療まで一貫した、患者様のニーズに沿った安全で安心できるチーム医療を提供します。
3. 地域医療 地域の医療・福祉施設と密接な連携を図り、いつでも誰でも安心して利用できる、救急医療に重点を置いた地域医療の中核病院を目指します。



患者の悩みや不安に「たえろ、よろず相談」「総合診療部」

収録日 二〇〇六年十月二日
取材ライター 石田 真奈美

医療法人財団 池友会 福岡和白病院 総合診療部 部長 嘉数 徹

平成十八年一月に新設された「総合診療部」。何となく具合が悪い、何科を受診すればよいかわからない…といった人を主な対象とする診療部ですが、その部長を務めるのが嘉数（かかず）徹先生です。一度会ったら忘れられない（？）個性的な風貌ですが、気さくな人柄は総合診療部に適任。部の新設から8カ月を経た今、現況や医療に対する思いなどを聞きました。

Q 平成十八年一月に新設された「総合診療部」はどのような科ですか。また、なぜこのような部署が新設されたのですか。

嘉数 「総合診療部」は簡単にいうと患者さんの訴えを聞く科、悩みをお聞きして相談相手になる科です。「何科を受診していいかわからない」「検査数値は正常なのに不調」「原因不明の不安を抱えている」という患者さんは少なくありません。各地の病院や診療科を訪ね歩いた人も多いと思います。そんな状況を解消するため、「総合診療部」は悩みを抱えて困っている患者さんの訴えを聞き、場合によっては的確な専門科に紹介するために開設されました。いわば「よろず相談窓口」ですね。

Q 現在の診療体制は。

嘉数 僕は部の新設と同時に着任しました。一～三月は一人で担当しましたが、四月から若い野田先生が着任されました。今は二人体制で診療しているので、患者さんと接する時間的な余裕も生まれ、診療に厚みや幅ができたように思います。

Q これまでどのような患者さんが受診されていますか。また、身体的にどのような診察や治療が行われるのでしょうか。

嘉数 中学生から高齢者まで老若男女、多様な患者さんが来られます。自律神経失調症や不定愁訴、それに糖尿や高血圧、高脂血症など生活習慣病の方が多いです。まずは患者さんの話を時

男性ほど顕著に効果が現れないから、ちよつと不利かなあ。もちろん必要ならきちんと薬も処方します。

栄養指導は難しいですよ。一人ひとり生活が違つし体質も違う。でも、できるだけ軽度のうちに食事や運動など生活習慣改善を始め、重症にならないよう予防することが大切。病気はできるだけ薬に頼らず、自分で治すものだと思うから。

Q 子どもの「嘉数」やごご姓は珍しくないわね。

嘉数 僕は埼玉県生まれですが、四歳から高校三年まで父母の故郷の沖縄で育ちました。沖縄が日本に復帰する前の時代で、親父は沖縄で開業医をしていたんです。高卒後、何となく福岡の予備校に入學して、福岡大学医学部に進學しました。専門は肝臓外科です。

Q どんな大学時代を過ごしたのですか。

嘉数 友達とバンドを組んで学園祭などで演奏したり…。実は二年間、天神のスナックで働いた経験があるんです。店の掃除や料理に始まり、接客だけでなく最後はホステスの管理まで任されるようになって、当然、大学は留年した笑。でもスナックのマスターの仕事を通じて、相手の話を聞く大切さを学んだし、それが今の「よろず相談」の外來診療に活かしているのかも…。

Q 卒業後、和白病院に着任されるまで、どちらで勤務されたのですか。

嘉数 卒業後は県内の病院や福大医局、信州大学、東京大学などに在籍。千葉の徳洲会病院を経て和白病院に着任、六年ぶりに福岡に戻ってきました。こんなタイプだから、若い福大の医局時代、大阪の労働者街にある病院に派遣されたことも。東大時代は家に帰る時間もなく、医局のソファで眠る日々でね、きつかったな。

その後、千葉の徳洲会病院に入り副院長、院長を務めました。院長といても実際は、喜界島や奄美大島、徳之島、沖縄永良部島などへ数日から一週間単位で離島診療に飛び回っていた。飛行機を乗り継いで島に到着したら、休む暇なく外來、時には緊急手術ということも。四年間ハードスケジュールだったけれど、僕自身が島の出身だし南の島が好き。島の診療では学ぶ点が多く、年齢に関係なく周りにはみな僕にとって先生だった。辺地医療では外來、病棟、検査、手術、救急などまでやるし全科当直

間の許す限りじつくり聞いて、必要なら検査し投薬を処方します。実は、僕は若いころから入一倍嗅覚が鋭いうえ、動物の力なが働く事がある。例えば代謝性疾患など、患者さんが入室された瞬間、顔つきや仕種、体臭、体調や態度、皮膚の状態などからピンとくるのが少なくない。何だか胸騒ぎがして一気に検査をオーダーしたら、難病が潜んでいたこともあった。

一方、生活習慣病などの場合は栄養科で指導してもらったり、運動を勧めるなど、できるだけ薬に頼らない治療を心がけています。

Q 栄養科と連携し、栄養指導をするのですか。



「よろず相談」の総合診療部。老若男女さまざまな患者さんに対し、親しみやすい笑顔で対応する嘉数先生

嘉数 僕は処方箋を書くだけ、あとは栄養科の皆さんがしっかりと指導してくれま（笑）。最近ではテレビや雑誌などで食生活や栄養バランスの大切さを学ぶ機会が増えたから、食生活改善や積極的な運動など、患者さんも真面目に聞いてくれます。素直に取り組む人ほどその効果も現れる。真面目なのは中高年で、女性より男性が熱心かな。女性はホルモンバランスが微妙なので、

が当たり前、医療設備が整った所ばかりではない。若い医者こそ離島などで豊富な経験を積むべきだと思います。また院長時代は院内のトイレ掃除隊にも参加するなど、現場と一緒に頑張って働いた。職員を管理しようとするのは間違いないだ、と気づかされたんです。

Q プライベートな時間はどのように過ごしていますか。

嘉数 実はかつて僕自身が高脂血症、糖尿病だった（苦笑）。でも患者さんに生活習慣病予防を勧めるのに自分がそれではダメだと思って、本格的にウエイトトレーニングを始めました。身体が資本だし、自ら生活習慣病克服のモデルになろうと思った。

今はボディビルクラブに週三回ほど通い、約九十分トレーニングしています。ポート部に所属していた大学時代より筋力がアップし、ベンチプレスで百二十キロを三回くらい上げられる。体重も約四カ月で九十三キロが八十六キロまで減量、目標は七十九キロです。五〇代でも真面目にやればこんなに効果が現れるし、高齢になっても筋力アップは可能。足腰を鍛えれば転倒予防になるし免疫力も向上、筋力は脳トレにもなる。高齢社会になるほど、自分で健康をつかむ力、幸せをつかむ力をつけて欲しいです。

Q 最後に、健康とは何でしょうか。ご自身の考えをお話してください。

嘉数 僕は「心身の健康は、利己的であってはいけない」と 생각합니다。いくら筋トレで鍛えても、その身体の使い途が大切。自分が健康であればこそ、他人の役にたつことが大事だと思う。バランスの中で生きるのが人間なのだから、周囲を気遣う精神がないと。

また運動や食事栄養など予防医学、予防治療の徹底もこれからますます大切になる。身体が壊れる前に支援することが大切です。

将来、好きな音楽を活かして人の心を癒すミュージシャンになりたいね。



日々のウエイトトレーニングの成果、鍛え上げた上腕部を披露。学生時代より今のほうがパワーアップしている

Profile



医療法人財団 池友会 福岡和白病院

総合診療部 部長 嘉数 徹
(かかず とおる)

1953年、埼玉県生まれ、沖縄県育ち。福岡大学医学部卒業。専門は肝臓外科、一般外科。今は一般内科も診療。福岡大学医学部医局、同大学院、信州大学病院、東京大学病院、千葉徳洲会病院などを経て、2006年1月、福岡和白病院「総合診療部」新設と同時に着任。千葉徳洲会病院時代は4年間、九州沖縄の離島診療に尽力。趣味はウエイトトレーニング、ドラム・パーカッション演奏。ドラムの練習は困難なので、ウクレレに転向を検討中。またウエイトトレーニングではベンチプレスで120キロをクリア。将来は「癒し」系の音楽活動をするのが夢。



オーストラリア旅行では、カンガルーのほかコアラとも記念撮影



診察風景 (2001年・エルサルバドル)



診察風景 (2006年・ジャワ島)



和白病院のジャケットを着て診察 (2005年・パキスタン)



自衛隊医療チームと共に (2005年・バンダアチェ)

福岡医師 海外医療活動

南米や東南アジアなど 海外で起きた大災害に、 緊急援助医療チームとして活動

近年、地震や津波など大災害に見舞われた諸外国へ、日本からもさまざまな支援チームが派遣されています。第一陣として、被災直後の地域に赴くのが医療チームですが、その先駆けとして、九〇年代後半から毎年のように海外で緊急の医療支援活動に尽力してきたのが救急センター長の福岡譲二医師。今回は、活動の原点や現地での支援状況などについて福岡医師に聞きました。



医療法人財団 池友会

福岡和白病院

救急センター長

福岡 譲二 医師

今年五月二十七日に発生したジャワ島中部地震。死者約五千八百人といわれる大災害でしたが、その際、国際協力機構（JICA）の国際緊急援助隊医療チームの副団長として現地医療活動に従事したのが福岡譲二医師です。テレビで取材に答える福岡先生の姿を見た人も多いでしょう。



2006年ジャワ島震災診療所

チームは医師四人を含む計二十四人で、早くも翌二十八日に現地入り。被害が最も大きかったバントウルに臨時の診療所を設置、貴重な小型のX線機器などを搬入して検査したり、時には遠方への巡回診療も実施。三十日から六月八日の間に約千二百人を診察、十日に帰国しました。バントウルは気温

■今や先端を行く日本の医療支援活動

日本初の海外援助隊派遣は七九年、カンボジア内戦による難民キャンプでした。以後、支援内容も災害援助から第一に緊急医療支援チームを派遣するなど内容も充実させてきました。

「当初、諸外国の後を追うように海外支援を始めた日本ですが、今では世界の先端を行くと思います。ジャワ島の時も、最も早く現地入りしたし装備も充実。基本的に援助隊は、現地政府から正式要請がないと現地入りできませんが、それを待っているのは遅い。だから先遣隊が真っ先に現地入りし被害を調査。その情報を得て、僕達が続いて現地入りするのです」。

援助活動は多様で、大きく物・人・資金の三つの援助があり、中でも人的援助には警察や消防などの救助◎医療、◎土木建築等という分野があります。

福岡先生は「日本の支援活動システムは合理的、効率的で非常にレベルが高い。今後はさらに、医療チームと土木建築などの復興



被災者の方に歌のプレゼント (2003年アルジェリア)

チームの連携が大切です。また災害発生直後の緊急支援活動、そして土木建築などの後の復興支援に加え、基本的な防災教育、防災対策など、単発的でなく途切れない「シームレスな援助」こそが重要」と言います。

また日本と諸外国の支援を比較し「例えば軍隊を派遣する先進国もありますが、日本からは僕らのような市民が現地に入る。現地の診療所も、日本チームは巨大な仮設テントですが、中にはエアコン付きの快適なプレハブを建てる国もある」と。現地の人々にとって親しみを覚えるのはどちらか、言ってもありません。「日本は、軍隊ではないところが現地で評価されていると思います」。

■緊急医療も地域医療もルーツは同じ

緊急医療支援活動には課題もあります。前述のシームレスな援助のほか「国内での後継者、若手の育成や、物資の輸送も大きな課題」と。薬や検査機器を含む医療品に加え、スタッフ全員が約二週間、現地で生活できる食料品や生活用品、仮設テントまで含めると、輸送物資は合計十トン超。それを一気に現地に搬入するにはどうすればよいのか…。

三十二〜三十三度、湿度約七〇%という厳しい環境でしたが、活動終了で診療所を閉じる際二時間かけてお礼に来てくれた患者さんもいた。僕らにとっては最高の喜び」と福岡先生は振り返ります。



ジャワ島震災巡回診療

■少年時代の震災体験が原点に

海外での緊急医療援助に赴く福岡先生。その原点は、自らの少年時代の体験にありました。「宮崎県えびの出身ですが、小学校入学前、地震で自宅が被災。約二カ月間、車やテントで避難生活を送りました。自衛隊が被災地入りした時は「夢中で駆け寄って行つたし、義援金で買った筆箱は高校まで使った」と。

佐賀医科大学卒業後、地域医療を志すなかで救急医療を修得。日本医科大学の救命救急センターなどを経て、初の海外医療活動が九七年に起きたマレーシア森林火災への国際協力機構（JICA）国際緊急援助隊でした。

以後、九八年からポリビアへ二年間、二〇〇一年エルサルバドル地震災害、〇二年ベネズエラ、〇三年アルジェリア地震、〇四年スマトラ沖地震津波災害、〇五年パキスタン地震、〇六年ジャワ島地震…と毎年どこかに飛び回っています。災害時の医療救援活動が主ですが、中には救命システム構築や各国の衛生環境視察、アドバイザーとして赴くことも。

「ポリビアへはスペイン語研修もそこに派遣され、最初は全く理解できなかった。ベネズエラでは到着翌日に全国ストからクーデターが発生、危険な思いもした」と。刺激的で楽しい」と笑顔で話しますが、心身ともにタフでなければ続かない仕事です。

一方、うれしい話も少なくありません。インドネシアのバンダアチェに入ったときのこと。「現地は特殊なアチエ語。日本語を話せる人なんかいないだろうと諦めていたら、JICAの元留学生が大勢いて通訳してくれた」そうです。日本が海外から期待される部分は何か、改めて考えさせられる話です。

海外活動もなかなか詳細までは伝わりません。福岡先生は「僕たちは日本の代表として現地に赴くわけだから、現地の人の感謝の声を伝える義務がある」と広報にも積極的です。最後に「支援活動は医療だけでなく事務、輸送など何でもある。日本できちんと仕事できる人は海外でも仕事できる。それに、何より快く送りだしてくれる病院の仲間感謝しています」。

若い頃に目指した辺地の地域医療、救命救急医療、そして海外医療支援。一見異なる分野にみえますが、福岡先生にとっては「非日常で困っている人を支える」という意味で、根本はみな同じ」なのです。



Profile

医療法人財団 池友会

福岡和白病院

救急センター長

福岡 譲二
(とみおか じょうじ)

1961年宮崎県出身。86年佐賀医科大学卒業後、日本医科大学救命救急医学教室入局、同救命救急センター研修医。88年東京警察病院脳外科、89年日本医科大学多摩永山病院救命救急センター、92年セント・ビンセント・ホスピタル（オーストラリア）集中治療室留学。97年初めてJICA国際緊急援助隊としてマレーシア森林火災に派遣。以後、98～99年ポリビア、2000年帰国し国立国際医療センター救急部に勤務。その後も01年エルサルバドル、02年ベネズエラ、03年アルジェリア、スマトラ島、04年スマトラ島、05年パキスタン、06年ジャワ島などメンバーとして派遣。05年から和白病院勤務。日本救急医学会指導医・専門医・評議員、日本中毒学会評議員、JATEC(TM)インストラクター、AHLISプロバイダー・インストラクター、MIMMSプロバイダー。



当院は、健康増進法の施行により、敷地内禁煙としています。御理解と御協力のほど宜しくお願い致します。

当院は敷地内禁煙

この度残念ながら10月末をもちまして、当院小児科を廃止せざるを得なくなりました。昨今の小児科医不足を背景に、大学より医師の引き上げの申し入れがあり、存続に向けて検討を重ねて参りましたが、後任医師の確保がままならず、診療体制が維持できない状況となりました。

皆様には大変ご迷惑をおかけ致しますが、ご理解、ご協力下さいます様何卒よろしくお願い申し上げます。

小児科の廃止



当院の福利厚生野球部マッシュが第50回読売旗争奪・福岡市早朝野球大会で、見事優勝を果たしました。10月末には九州・山口大会へ出場します。再び、良い報告ができればと思います。

野球部マッシュ優勝!!



9月30日にスマイル委員会主催でドッジボール大会を行いました。皆で一汗かいて、チームワークが深まったように思います。

スマイル委員会主催ドッジボール大会



平成19年4月に、福岡和白病院の横に「福岡和白リハビリテーション学院」が開校されます。あなたも、リハビリテーションのスペシャリストを目指してみませんか。

福岡和白リハビリテーション学院開校予定

お問い合わせ
福岡和白リハビリテーション学院
開設準備室 ☎092-608-8600



9月21日・22日の2日間、院内研究発表会を行いました。業務の間に、より良い医療が提供できるように研究を行なった成果を発表しました。

院内研究発表会

ドクターカー運用開始

病院と病院（診療所）の間をつなぐ際、
緊急処置の必要な患者様の為に
福岡和白病院 **Doctor Car** が
医師、看護師等の医療スタッフを乗せ、
24 時間体制 で走ります。



※心臓疾患の患者様を中心とした運用をおこないます。



ドクターカー（モビルCCU）のご案内



医療法人財団 池友会
福岡和白病院
ハートセンター長
斉藤 太郎

福岡和白病院ハートセンターにおきましては新病院移転に伴い診療内容の充実日々努めてきたところであります。少しずつではありますがレベルの向上を実現できつつあると考えております。

かねてより私たちは地域医療の中核機能を担える病院を目指してきましたが、そのためには私どもの診療の質の向上とともに病診連携の一環として循環器領域におけ

る救急対応を確立する必要があります。

このたび福岡和白病院ハートセンターでは急性心筋梗塞、不安定狭心症、急性大動脈解離など血行動態が不安定であり緊急の治療を要する疾患に対応すべくドクターカーを導入いたしました。

福岡和白病院ドクターカーは、地域の先生方の要請により福岡和白病院ハートセンターの医師、看護師が乗車し出動します。そして、出動先で必要に応じて呼吸管理・ペースメーカー・IABP・PCPSなどの補助循環装置を作動させながら搬送します。シームレスに緊急カテテル検査や緊急手術につなげることが可能になるものと期待されます。